

当翻訳は、法務省入国管理局による仮訳であり、正確には原文に当たってください。
また、今後当仮訳は精査の上、変更されることがあり得ることにご留意ください。

英国内務省

国別政策及び情報ノート アフガニスタン：「西洋化した」と 認識されるアフガニスタン人

第1.0版

2018年1月

序文

この文書は、英国内務省（Home Office）における特定の種類の保護と人権の申請の取扱いに関する意思決定者に対し、出身国情報（COI：Country of Origin Information）及び政策指針を提供する。本文書の中には、申請が庇護、人道的保護又は裁量による在留許可の認定を受ける正当性があるかどうか、また、申請が却下されようとしている場合において、当該申請が2002年国籍、移民及び庇護法（Nationality, Immigration and Asylum Act 2002）第94条に基づき、「明らかに根拠のないもの」として証明される可能性が高いかどうかについての記述が含まれている。

意思決定者は、申請事案を、その具体的な事実関係及び関係する全ての証拠（本文書に含まれる政策指針、入手できるCOI、適用される判例及び関連政策に関係する内務省の案件審査業務向けガイダンスを含む）を考慮に入れた上で、個別に審査しなければならない。

国別情報

本文書内のCOIは、「[出身国情報の処理に関する欧州連合共通ガイドライン（Common EU \[European Union\] Guidelines for Processing Country of Origin Information \(COI\)）](#)」及び「[欧州庇護支援事務所の調査向けガイドライン、国別情報の報告手法（European Asylum Support Office's research guidelines, Country of Origin Information report methodology）](#)」に定める原則に従って、すなわち、その関連性、信頼性、正確性、客観性、最新性、透明性及び追跡可能性を十分考慮に入れながら、調査した上で提示されている。

全ての情報は、一般に信頼でき、かつ、公衆が利用できる情報源から慎重に選択されたものであり、又は一般に入手することができる情報である。裏付け文書の詳細な出版情報は脚注に記載されている。情報が正確であり、バランスが保たれており、裏付けられていることを保証するため、また、公表時点で包括的な、かつ、最新の状況が提供されることを確実にするため、通常は複数の情報源を利用している。様々な見解や意見を提供するため、情報は可能な限り比較され、対照されている。情報源を掲載しているが、それを以て情報又は表明された見解を支持しているということではない。

フィードバック

我々の目標は、提供する資料を継続的に改善することである。したがって、本文書にコメントを寄せたい場合には、[国別政策・情報チーム（Country Policy and Information Team）](#)まで電子メールを送信していただきたい。

国別情報に関する独立諮問機関

国別情報に関する独立諮問機関（IAGCI：Independent Advisory Group on Country Information）は、内務省のCOI資料の内容について国境・移民局独立首席調査官（Independent Chief Inspector of Borders and Immigration）に勧告を行う目的で2009年3月に同首席調査官によって設置された。IAGCIは、内務省のCOI資料に関するフィードバックを歓迎する。内務省の資料、手続きまたは政策を承認することは、IAGCIの役割ではない。

IAGCIの連絡先

国境・移民局独立首席調査官

5th Floor, Globe House, 89 Eccleston Square, London, SW1V 1PN

電子メール：chiefinspector@icinspector.gsi.gov.uk

IAGCIの職務に関する情報及びIAGCIが既に検証を終えたCOI文書のリストは、独立首席調査官の下記ウェブサイトで閲覧可能である。

<http://icinspector.independent.gov.uk/country-information-reviews/>

目次

政策指針	5
1. 序論	5
1.1 申請の根拠.....	5
1.2 注目すべきポイント	5
2. 問題の検討.....	5
2.1 信憑性.....	5
2.2 特定の社会的集団.....	6
2.3 リスク評価.....	6
2.4 保護.....	8
2.5 国内移住.....	8
2.6 証明.....	9
2.7 申請書の再提出.....	9
3. 政策の要約.....	9
 国別情報.....	 11
4. 西洋諸国からの帰還者	11
4.1 概観.....	11
4.2 帰還者数.....	13
5. 社会的姿勢及び取扱い.....	13
5.1 西洋に対するアフガニスタン人社会の見方.....	13
5.2 帰還者に対する社会の見方及び社会規範.....	14
5.3 社会的受容.....	16
5.4 差別及び烙印.....	17
5.5 帰還者を標的にした事件.....	20
 付属書A.....	 26
参照した追加の情報源.....	26
バージョン管理及び連絡先情報.....	27

政策指針

更新日：2018年1月15日

1. 序論

1.1 申請の根拠

1.1.1 申請者が「西洋化した」と認識されることを理由に非国家機関から迫害又は深刻な危害を加えられる恐怖

1.2 注目すべきポイント

1.2.1 「西洋化した」という文言は、決して明確に定義することができない。複数の情報源は「西洋化した者」を、西洋の国々の価値観、外観、言語又は文化を採用している者と（曖昧に）説明している。

1.2.2 本情報ノートは、資格指令（Qualification Directive）第15条(c)項又は欧州人権条約（European Convention on Human Rights）第3条に基づいて、一般化された無差別暴力のリスクとは対照的に、非国家機関から標的として狙われる危険に関して記述している。そのような危険を理由とする申請の検討については、国別政策及び情報ノート（CPIN：Country Policy and Information Note）「[アフガニスタン：治安情勢及び人道的状況](#)」を参照し、反政府分子（AGE：Anti-Government Elements）がどのような人々を脅威として認識しているかに関する情報については、CPIN「[アフガニスタン：反政府分子の恐怖](#)」をそれぞれ参照されたい。

2. 問題の検討

2.1 信憑性

2.1.1 信憑性の評価に関する情報については、[信憑性の評価及び難民地位の認定に関する庇護指針](#)を参照されたい。

2.1.2 また、意思決定者は、庇護申請者が以前に英国査証又はその他の形態の在留許可を申請しているかどうかを確認しなければならない。査証に一致する庇護申請は、庇護面接を実施する前に調査しなければならない（[査証の一致、英国査証申請者による庇護申請に関する庇護指針](#)を参照）。

2.1.3 さらに、意思決定者は、言語分析テストを実施する必要性を検討しなければならない（[言語分析に関する庇護指針](#)を参照）。

2.2 特定の社会的集団

2.2.1 「西洋化した」と認識されるアフガニスタン人は、1951年国連難民条約における意味の範囲内での特定の社会的集団（PSG：Particular Social Group）を構成するとは考えられていない。なぜなら、こうした人々は変えることのできない固有（生来）の特徴を共有しておらず、また、一般に、アフガニスタン社会の中で異なる集団として認識されるわけでもなく、独自のアイデンティティを有していることもないからである。

2.2.2 難民地位の認定を受けるために必要なものとして難民条約が定める5つの理由のいずれにも関係していない場合、各申請事案について検討すべき問題は、特定の申請者が人道的保護（HP：Humanitarian Protection）を受けるのに十分なレベルで深刻な危害を加えられる現実的リスクに直面しているかどうかということである。

2.2.3 特定の社会的集団に関する詳細な指針については、[信憑性の評価及び難民地位の認定に関する庇護指針](#)を参照されたい。

2.3 リスク評価

2.3.1 アフガニスタンで政府、市民社会及び国際社会（国際部隊及び国際的人道・開発機関を含む）に関係している又はこれらを支持していると認識される市民は、タリバンなどAGEによる威嚇、脅迫、誘拐及び標的攻撃の対象とされている。この市民の中には、西洋諸国からの帰還者も含まれる可能性がある（[帰還者を標的にした事件](#)及び国別政策及び情報ノート「[アフガニスタン：反政府分子の恐怖](#)」を参照されたい）。

2.3.2 これらの帰還者のうち、ごく少数の者が「西洋化した」又は少なくとも西洋で時間を過ごしたという理由でAGEから標的とされ、襲撃されたという報告が散発的にあがってきているが、これらの襲撃の動機は不明な場合が多く、被害者の民族性などの要因が大きく関係しているように窺える（[帰還者を標的にした事件](#)を参照されたい）。

2.3.3 2014年、2人のハザラ民族（Hazara）アフガニスタン人がタリバンにより標的とされ、襲撃されたと報じられた。この2人は最近オーストラリアから帰還したばかりであるため、「西洋的である」と認識されたとされている。シーア派イスラム教徒が圧倒的に多く、アフガニスタンにおけるシーア派イスラム教徒の大半を占めるハザラ民族は、アフガニスタンの過激派組織により標的とされてきた。ハザラ民族はその民族性及び/又は宗教を理由に危険に晒される可能性があることが証拠により示唆されている。したがって、報道されている事件は、この2人が西洋の国若しくは政治的見解に関係していると認識された又

は西洋的な価値観若しくは外観を採用したという理由ではなく、ハザラ民族性を理由として起きた可能性が高い（[帰還者を標的にした事件](#)を参照されたい）。

2.3.4 帰還者が経験した出来事（その幾つかは暴力事件に関係していると伝えられている）に関する事例報告がある。しかしながら、主張されているこれらの暴力事件が「西洋化した」結果として起きていることを示す証拠は一切ない。また、帰還者に対する暴力事件が外見上「西洋化した」態度に見えることに起因していることを裏付ける一般的な根拠もない（[帰還者を標的にした事件](#)を参照されたい）。

2.3.5 これとは対照的に、特に、帰還者が西洋で成功を遂げた者として見られる場合、西洋からの帰還者の多くが家族や社会に温かく迎えられていることを示す報告が複数なされている（[社会的受容](#)を参照されたい）。

2.3.6 2001年にタリバンが権力の座を追われて以来、大量のアフガニスタン人が西洋諸国（欧州、オーストラリア、米国及びカナダ）へ渡り、その多くが庇護を求めた。これらの人々のうち、数千人がその後アフガニスタンへ帰還した（自主帰還を含む）。たとえば、2016年、1万人以上のアフガニスタン人が集団で欧州諸国から帰還する一方、英国のみから2004年以降に1万人以上が帰還した。これらの帰還者の大半は、首都カブール（Kabul）に帰還した若者である。何人の帰還者が「西洋化した」のか又はそのように認識されているのかは不明であるが、その多くは「西洋の」趣味、行動、そして一部の事例では、「価値観」を採用している可能性が高い（[西洋諸国からの帰還者](#)を参照されたい）。

2.3.7 大量（数万人）の帰還者と比較して襲撃事件の報告が少数であることを踏まえれば、暴力的な襲撃又は誘拐を受ける危険は極めて低いように窺える。

2.3.8 西洋諸国から帰還するアフガニスタン人の中には、差別や社会的烙印を受ける可能性がある者もいる。しかしながら、これは、「西洋化した」という理由ではなく、帰還することにより「失敗した」と認識されることが理由であるように窺える。これにもかかわらず、その性質及び又は反復性により、このような取扱い（差別や社会的烙印）が迫害又は深刻な危害に相当するレベルに至る可能性は低い（[帰還者に対する社会の見方及び社会規範](#)及び[差別及び烙印](#)を参照されたい）。

2.3.9 帰還者が直面すると伝えられている「差別と烙印」が「西洋化した」ことに起因していることを示す証拠はほとんどないに等しい。大半の場合、「差別と烙印」は、庇護を申請したが失敗に終わってしまい、したがって、移住に対する家族やコミュニティの期待に応えられなかったことに対する恥の意識が原因になっている（[差別及び烙印](#)を参照され

たい)。

2.3.10 リスク評価に関する詳細な指針については、[信憑性の評価及び難民地位の認定に関する庇護指針](#)を参照されたい。

2.4 保護

2.4.1 申請者の恐怖が非国家機関から迫害及び/又は深刻な危害を加えられることにある場合、意思決定者は国家が効果的な保護を与えることができるかどうかを評価しなければならない。

2.4.2 AGEが支配する地域の場合、国家は効果的な保護を与えることができない（国別政策及び情報ノート「[アフガニスタン：反政府分子の恐怖](#)」を参照されたい）。

2.4.3 カブール及び政府が支配するその他の地区や都市の場合、当局は一般に、「西洋化した」と認識される帰還者を相手に起きるあらゆる差別に対して効果的な保護を与える用意があり、また、与えることができる（国別政策及び情報ノート「[アフガニスタン：反政府分子の恐怖](#)」も参照されたい）。

2.4.4 国家の保護を利用できるか否かを評価する際の詳細な指針については、[信憑性の評価及び難民地位の認定に関する庇護指針](#)を参照されたい。

2.5 国内移住

2.5.1 国内移住は、庇護申請の検討に関係しており、また、合理的な選択肢となり得る。国内移住の可能性は、申請者個人の状況によって決まる。

2.5.2 2012年3月14～15日に開かれた[AK（第15条\(c\)項）Afghanistan CG \[2012\] UKUT 00163\(IAC\)（2012年5月18日）](#) 裁判審理の場で、カブール市が国内移住の対象地になり得るかどうかを評価した際、カブールへ帰還することは一般に危険でもなければ不合理でもないとして上級裁判所は判示した（第249B(iv)項）。

2.5.3 同上級裁判所は、上記ポイントに条件を付け、独身の女性や女性の世帯主に対し、男性のネットワークの支援を受けずに国内移住することを期待するのは不合理であろうと判示した（第249B(v)項）。国別政策及び情報ノート「[アフガニスタン：ジェンダーに基づく危害/暴力を恐れる女性](#)」も参照されたい。

2.5.4 一般に、脅威が非国家機関から来る場合、国内移住は合理的になる可能性が高い。それにもかかわらず、意思決定者は脅威の性格と発生源に加え、申請者の個人的状況とプロフィールを検討しなければならない。

2.5.5 国内移住と検討すべき要因に関する詳細な指針については、[信憑性の評価及び難民地位の認定に関する庇護指針](#)を参照されたい。

2.6 証明

2.6.1 申請が却下される場合、その申請が2002年国籍、移民及び庇護法（Nationality, Immigration and Asylum Act 2002）第94条に基づき「明らかに根拠のないもの」として証明される可能性が高い。

2.6.2 なぜなら、帰還者が西洋の国で時間を過ごしたために「西洋化した」ことに起因して、帰還者に対する暴力又は差別の事件が起きたことを示す一般的な証拠がないからである。

2.6.3 証明に関する詳細な指針については、「[2002年国籍、移民及び庇護法第94条に基づき、保護及び人権申請を（明らかに根拠のないものと）証明する行為](#)」を参照されたい。

2.7 申請書の再提出

2.7.1 西洋化したことに起因するリスクに基づいて申請書が再度提出された場合、上記理由により、これらの申請書は明らかに根拠のないものであると考えられる。当該申請書は同じ理由で庇護の認定を受ける現実的な見込を有していないことから、入国管理規則（Immigration Rules）第353項に基づく新たな申請として適格ではない。再提出された申請書が却下された場合、申請者は不服を申し立てる権利がない。

2.7.2 申請書の再提出に関する指針については、[申請書の再提出に関する庇護指針](#)を参照されたい。

3. 政策の要約

3.1.1 一部の人々は、西洋の政府又は機関に勤務しているということで、認識される本人の政治的意見を理由として危険に晒される可能性がある（国別政策及び情報ノート「[アフ](#)

[ガニスタン：反政府分子の恐怖](#)」を参照されたい）。しかし、これは、いわゆる「西洋化した」と認識されることとは著しく異なるものである。

3.1.2 いわゆる「西洋化した」帰還者に対する襲撃の事案を伝える限られた少数の報告は、他の動機、たとえば、民族性を指摘している。帰還者数と帰還者への襲撃に係る報告件数の比率を踏まえると、迫害及び/又は深刻な危害を加えられる現実的なリスクがあることを示唆するような信頼できる証拠はほとんどない。

3.1.3 帰還者は一般に社会的烙印を押されるという指摘がある。多くの情報筋は帰還者が直面する重大な課題としてこの点を挙げている。しかし、社会的烙印には、庇護申請の失敗及び/又はそのことによる経済的意味合いが暗に含まれている。それにもかかわらず、その性質及び/又は反復性により、このような取扱いが迫害又は深刻な危害に相当するレベルに至る可能性は低い。

3.1.4 帰還者に対する暴力事件が外見上「西洋化した」態度に見えることに起因していることを裏付ける一般的な証拠はない。

3.1.5 帰還者が直面すると伝えられている「差別と烙印」が「西洋化した」ことに起因していることを示す証拠はほとんどないに等しい。むしろ、「差別と烙印」は、庇護を求めたが失敗に終わってしまったことに対する恥の意識が原因になっている。

国別情報

更新日：2017年12月20日

4. 西洋諸国からの帰還者

4.1 概観

4.1.1 非営利研究機関であるオスロ国際平和研究所（PRIO：Peace Research Institute Oslo）の2015年7月付「ポリシー・ブリーフ（Policy Brief）」は、英国とノルウェーから援助による自主的帰還を果たしたアフガニスタン人の社会復帰の状況に関して報告している。（帰還後にインタビューを受けるという形で）研究に参加したアフガニスタン人の大半は、アフガニスタンに帰還することを望んでいなかったとポリシー・ブリーフは記述している。しかし、英国とノルウェーでインタビューを受けた欧州パスポートを持つアフガニスタン人の多くはPRIOに対し、短期間だけ、大半は家族を理由にアフガニスタンを訪問したことがあると回答した¹。

4.1.2 UNHCRが2016年4月19日に公表した「アフガニスタン出身の庇護希望者の国際保護ニーズを評価するための難民該当性ガイドライン（UNHCR Eligibility Guidelines for Assessing the International Protection Needs of Asylum-Seekers from Afghanistan）」の記述によると、個人は「西洋化した」と認識され、したがって、政府若しくは国際社会に関係している又はこれらを支持していると認識されるために標的とされる可能性がある²。

4.1.3 また、オーストラリア政府外務通産省（DFAT：Department for Foreign Affairs and Trade）の報告書は、次のように記述している。

「アフガニスタンは一般に、西洋諸国から自主的帰還、非自主的帰還のいずれも受け入れているが、近年、政府は到着便に着陸許可を与えないことが多い。西洋諸国からの帰還者はほぼ例外なくカブールに帰還する。大半の帰還者は家族でなく独身男性である。多くの帰還者は経済的な理由から、故郷の州に戻るのではなくカブールにとどまることを選択するとDFATは理解している。アフガニスタンに帰還した人々を追跡するためのメカニズム（仕組み）がないため、こうした人々が帰還時に直面する状況を評価することは困難である。DFATは、西洋諸国からの帰還者が庇護を求めたもののその認定を受けることができない

¹ オスロ国際平和研究所「アフガニスタン人は欧州から援助による自主的帰還を果たした後、社会復帰できるのか」（2015年7月付）

http://file.prio.no/publication_files/PRIO/Oeppen%20-%20Can%20Afghans%20Reintegrate%20after%20Assisted%20Return%20from%20Europe,%20PRIO%20Policy%20Brief%207-2015.pdf. [アクセス日：2017年11月22日]

² UNHCR「アフガニスタン出身の庇護希望者の国際保護ニーズを評価するための難民該当性ガイドライン」（42頁）（2016年4月19日付）

<http://www.refworld.org/docid/570f96564.html>. [アクセス日：2017年11月23日]

かったために、国家当局から否定的な注目を集めるということを示唆するような情報を一切有していない。

「欧州連合（EU）とアフガニスタンは2016年10月、『EUに在留するための条件を満たしていないアフガニスタン人が威厳を持って、安全にかつ秩序正しくアフガニスタンに帰還する』体制を構築するための協定に調印した。その後、ドイツは、2017年5月31日に起きたカブール襲撃と治安情勢の全般的悪化に対応して、アフガニスタン人の送還を一時的に中断すると発表した。

「DFATは、西洋諸国からの帰還者が西洋の国で時間を過ごしたことを理由に誘拐され、又はその他の方法で標的にされたと主張する報告が時折行われていることを承知している…国際的な繋がりがあることを自ら認める人々は、反政府分子から標的とされる危険が高い。このような人々の中には、おそらく西洋諸国からの帰還者が含まれると考えられる。しかしながら、大半の帰還者はそれまで在留していた国との繋がりを秘密にするための対策を講じるとDFATは理解している。このような状況において、西洋諸国からの帰還者が暴力又は差別に晒されるリスクは、同様の民族的及び宗教的プロファイルを持つ他のアフガニスタン人よりも著しく高いものではないとDFATは評価している。」³

4.1.4 DFATは、アフガニスタンにおけるハザラ民族に関する2017年9月付報告書の中で、次のように評価している。

「…雇用、公式声明又はその他の繋がりにより公然とした形で政府又は国際社会と関係しているハザラ民族は、反政府分子から標的にされる危険性が高い。しかしながら、このリスクは同じ状況にある他の民族についても当てはまる。国際的な繋がりを有している（すなわち、政府又は国際社会と関係がある）ハザラ民族は、その関係を公然と強調しない限り、結果として暴力を受ける危険性が低いとDFATは評価している。これは、西洋諸国で時間を過ごしたハザラ民族にも当てはまる。」⁴

³ オーストラリア政府外務通産省「DFAT 国別情報レポート：アフガニスタン」(第5.20項~第5.22項)(2017年9月18日)

<http://dfat.gov.au/about-us/publications/Documents/country-information-report-afghanistan.pdf>
[アクセス日：2017年11月23日]

⁴ オーストラリア政府外務通産省「DFAT テーマ別レポート：アフガニスタンにおけるハザラ民族」(第3.18項)(2017年9月18日)

<http://dfat.gov.au/about-us/publications/Documents/country-information-report-hazaras-thematic.pdf>
[アクセス日：2017年11月23日]

4.2 帰還者数

4.2.1 EUの公式統計によると、2008年以降、およそ4万人のアフガニスタン人が欧州諸国（ノルウェーを含む）からアフガニスタンに帰還している。このうち、1万人以上は2016年に帰還した⁵。2004年以降、1万人以上のアフガニスタン人が英国から自主的に帰還又は強制的に送還されている⁶。

5. 社会的姿勢及び取扱い

5.1 西洋に対するアフガニスタン人社会の見方

5.1.1 欧州庇護支援事務所（EASO：European Asylum Support Office）は、様々な情報源を引用し、西洋諸国から帰還したアフガニスタン人の状況について、次のように報告している⁷。

「大まかに言って、国際部隊が駐留していることを理由に西洋が最近数十年間に亘ってアフガニスタン人社会に与えた『影響』は、アフガニスタン人から期待、尊敬、疑念及び敵意が入り混じった形で見られている。アフガニスタン人社会は、都市部のリベラル・エリートやカブールの若い職業人から、イスラム及び原理主義者イデオロギー（教育を受けた若者の間に広がる思想を含む）と合致する都市部や農村部のアフガニスタン人（若者を含む）に至るまで、西洋について多様な見解を有している。アフガニスタン人社会は保守的であるという状況の中で、カブールの都市生活者は、国内のより保守的な他の地域に住む人々と比べてより進歩的であると複数の情報源が説明している。幾つかの情報源によると、アフガニスタンは極めて伝統的な文化を重んじているにもかかわらず、ファッション、娯楽、タトゥー（刺青）など西洋のトレンドと影響が若手のアフガニスタン人の間でますます人気を高めている。また、カブール市には、都市生活をしているアフガニスタンの男女が混ざり合い、西洋人も頻繁に通うレストランやカフェが多数ある。ただし、これらの場所は反政府分子の襲撃や警察の強制捜査を受けている。Dr. Schusterは、カブール市自体を様々なコミュニティ（極めて保守的なコミュニティを含む）の集合体と形容している。彼女は、アフガニスタン人社会において『西洋化』に対する『単一の姿勢』は存在しないと

⁵ ユーロスタット（Eurostat）「庇護及び管理された移住：送還命令を受けて帰還した第三人一年間データ（概数）、最新版」（2017年7月17日）

<http://ec.europa.eu/eurostat/web/asylum-and-managed-migration/data/database>. [アクセス日：2017年11月28日]

⁶ 英国内務省「国内統計：図表リスト」（帰還者）（2017年8月24日）

<https://www.gov.uk/government/publications/immigration-statistics-april-to-june-2017/list-of-tables#returns>. [アクセス日：2017年11月30日]

⁷ 欧州庇護支援事務所「EASO 出身国報告：アフガニスタン - 社会的及び法的規範の下で標的にされる個人」（13頁）（2017年12月）

https://coi.easo.europa.eu/administration/easo/PLib/Afghanistan_targeting_society.pdf. [アクセス日：2017年12月20日]

説明した。アフガニスタンには『西洋の価値観』について極めてオープンな人々や社会又は国際部隊、NGO若しくは国際機関で勤務している人々が多数存在する一方、社会や個々の家族の中には欧州から帰還する者に脅威を与える可能性がある十分に保守的な人々も存在しているという見解を彼女は示した。Abubakar Siddiqueは、『西洋化』という概念はアフガニスタンにおいて、より広範な社会的及び政治的姿勢だけでなく、より狭く定義された外観やファッションの選択も含まれているという意見を述べた。」⁸

5.1.2 EASOは続けて、次のように報告している。

「また、Abubakar Siddiqueは、西洋がアフガニスタンでどのように見られているかについては、カブール市と農村部の間で大きな差異が存在するが、『間が悪い時に間の悪いこと』を話すと、否定的な反応を引き起こす可能性がある」と語った。さらに、同プログラム職員は、イスラム教又は社会の考えに反した発言をすれば、状況が一気に悪化する可能性がある」と述べ、2015年に暴徒がFarkhunda Malikzadaを殺害した事件を例に挙げた。Dr. Schusterは、帰還者、特に欧州に長期間在留していた若者が西洋にいる間にイスラム教に批判的な立場を身に着けるようになれば、その大半は標的にされる危険に晒されることになるという意見を述べた。しかしながら、これさえも、本人の自己検閲能力、成熟度、精神的健康状態、本人を取り巻くアフガニスタンの社会環境に対して鋭敏になる能力、何を語り、何をするのが不適切なのかを判断し、選択する能力に大きく左右されると彼女は語っている。Dr. Schusterの説明によると、個人が帰還する具体的な地域や地元コミュニティと家族の性質及び姿勢といった要因が西洋から帰還した際に問題に直面するかどうかを判断する上で重要である。アフガニスタン人社会は『西洋化』に対して様々なレベルでの寛容度を有しているので、帰還者がこの点に関してどのように受け入れられるのかを予測するのは極めて困難であると彼女は語った。カブール西部にあるダシュテバルチ（Dahst-e Barchi）など比較的安全であると考えられている地域内においてさえも、西洋からの帰還者には、『西洋化』の概念について極めて保守的な考えを持っている家族がいる可能性がある」と彼女は説明した。」⁹

5.2 帰還者に対する社会の見方及び社会規範

5.2.1 EASO報告書は、帰還者が家族や社会からどのように認識されるかに関する対照的

⁸ 欧州庇護支援事務所「EASO 出身国報告：アフガニスタン – 社会的及び法的規範の下で標的にされる個人」（99~100 頁）（2017 年 12 月）

https://coi.easo.europa.eu/administration/easo/PLib/Afghanistan_targeting_society.pdf.

[アクセス日：2017 年 12 月 20 日]

⁹ 欧州庇護支援事務所「EASO 出身国報告：アフガニスタン – 社会的及び法的規範の下で標的にされる個人」（100 頁）（2017 年 12 月）

https://coi.easo.europa.eu/administration/easo/PLib/Afghanistan_targeting_society.pdf.

[アクセス日：2017 年 12 月 20 日]

な見解を引用し、これは個々の状況に左右されることが多いとして、次のように記述している。

「2013年以降のギリシャとイスタンブールにおけるアフガニスタン人難民に関して報道してきたカブールに拠点を置くアフガニスタン人ジャーナリストのAli M. Latifiは、本報告に関してEASOと通信し、何らかの点で自身を目立つようにするアフガニスタン人は、一生をアフガニスタンで生活し、一度も出国したことがないアフガニスタン人、学習するために出国し、帰還したアフガニスタン人、又は子どもの時に出国し、成人となって帰還したアフガニスタン人であるかを問わず、『西洋化した』と認識される可能性があると言った。これは、個人がアフガニスタンに在る間、どのように振る舞うかという問題であると彼は語っている。前記プログラム職員によると、イランで育ったアフガニスタン人は、社会から『イラン化した』又は『アフガニスタン人とは言えない』とみられる可能性がある。イランで育ったアフガニスタン人は、特定のアクセントを有しているために、揶揄され、職を得る際にも困難に直面すると伝えられている。たとえば、かつてはイランで生活し、今般カブールで衣類デザイングループを立ち上げた若いアフガニスタン人を取り上げたアフガニスタン・トゥデイ (Afghanistan Today) の記事は、彼がその『西洋的な』外観とスタイルにより、皮肉的及び侮辱的発言をされ、又は「ゲイ」若しくは「イラン人」 (Iranigak) と呼ばれることもある（それにもかかわらず、この外観とスタイルはアフガニスタンの若者の間で人気がある）と説明している。アフガニスタンでは、自身の行動、ボディー・ランゲージ、話し方と話す内容、どのように認識されているかについて常に意識していなければならないとDr. Schusterは語った。欧州から帰還し、暗黙のルールを知らず、忘れ、間違いをし、思い誤り、又は間違いを犯す者は、『生意気』、非礼又は無遠慮であると認識される可能性がある。」¹⁰

5.2.2 EASO報告書で引用されているAli Latifiの意見によると、

「... 人は、『西洋化している』と認識されるためには、『他者と異なるように見せよう』として『よく目立ち、よく話す』ようにしなければならず、また、自身を西洋化しているように見せるために『自身のやり方』から逸脱しなければならない。彼によると、衣服の着用の仕方でも又は行き過ぎた外国語を大量に使用することで自身を目立たせるようにする者は、『西洋化している』と見られる。農村部においては、人が地元の慣習と基準に従おうとしない場合、その者は一層目立つことになる」と彼は語った。」¹¹

¹⁰ 欧州庇護支援事務所「EASO 出身国報告：アフガニスタン – 社会的及び法的規範の下で標的にされる個人」(101 頁) (2017 年 12 月)

https://coi.easo.europa.eu/administration/easo/PLib/Afghanistan_targeting_society.pdf.
[アクセス日：2017 年 12 月 20 日]

¹¹ 欧州庇護支援事務所「EASO 出身国報告：アフガニスタン – 社会的及び法的規範の下で標的にされる

5.2.3 さらに、EASO報告書は次のように記述している。

「国際移住機関（IOM：International Organization for Migration）のMasood Ahmadiによると、人がコミュニティの規範を尊重しなければ、その者に問題が生じる可能性がある。彼は、欧州で育った若者に関して、問題は社会自体ではなく、アフガニスタン社会に順応し、復帰する能力に起因していると説明した。彼は、人が欧州で過ごす時間の長さとその結果として人が変わる度合いもまた、アフガニスタン社会への復帰に際して特別の困難に遭遇する可能性に影響を及ぼすという見解を示した。彼によると、アフガニスタン社会への円滑な復帰は、国外で過ごした時間の長さとのネットワークの支援の利用可能性に関係している。Abubakar Siddiqueは、アフガニスタン国外での経験を自身の中に取り入れている者と、国内の文化と慣習を知り、理解している者を対照しながら、このように人がアフガニスタン国外で過ごす時間は社会復帰に影響を与えると語っている。Ali Latifiによると、帰還し、国内の慣習に従わないアフガニスタン人は、国内の慣習を知らない理由として、『都市化していると言ってごまかす』ことができる。彼は、従うべき国内の慣習と伝統があることを帰還者が知っていながら、それに従わない又は自身のためにそれを破ることを選択する場合の方がより侮辱的であり、無礼の兆候であるという見解を示した。」¹²

5.3 社会的受容

5.3.1 EASO報告書は、次のように記述している。

「アフガニスタン調査評価機構（AREU：Afghanistan Research and Evaluation Unit）が2016年に実施したアフガニスタンにおける男らしさに関する調査によると、アフガニスタン人社会は、家族を養う男性の能力を自己像及び名誉と結び付けており、したがって、そのような男性に特徴的な完全性の定義に関して高い期待と大きな圧力をかけている。西欧及び北欧諸国は高い「象徴的価値」を有しており、移住の成功という概念はアフガニスタンにおいて個人と家族の名誉及びコミュニティの地位に関係している。また、アフガニスタン調査評価機構（AREU）とUNHCRが公表した同伴者のいない未成年者のアフガニスタン人に関する2014 報告書の説明によると、海外へ行き、送金してくるアフガニスタン人児童は、本人が属する国内のコミュニティから「高く評価されて」おり、これに促されて

個人」（102 頁）（2017 年 12 月）

https://coi.easo.europa.eu/administration/easo/PLib/Afghanistan_targeting_society.pdf.

[アクセス日：2017 年 12 月 20 日]

¹² 欧州庇護支援事務所「EASO 出身国報告：アフガニスタン – 社会的及び法的規範の下で標的にされる個人」（103~104 頁）（2017 年 12 月）

https://coi.easo.europa.eu/administration/easo/PLib/Afghanistan_targeting_society.pdf.

[アクセス日：2017 年 12 月 20 日]

他の家族も子どもを同伴者なしで海外に行かせようとする場合がよくある。ラジオ・フリー・ヨーロッパ（Radio Free Europe）/ラジオ・リバティ（Radio Liberty）（RFE/RL）とアフガニスタンに焦点を合わせたRFE/RLウェブサイトGandharaの上級特派員であるAbubakar Siddiqueによると、西洋から帰還する人々はしばしば、見習うべきモデルとして尊敬される。IOMアフガニスタンの帰還、社会復帰及び再定住に関する国内プログラム・マネージャーであるMasood Ahmadiは、本報告書に関してEASOと通信し、彼の経験とアフガニスタン人帰還者とのインタビューに基づき、欧州から帰還した大半のアフガニスタン人は家族、親族及びコミュニティにより肯定的に迎え入れられると説明した。」¹³

5.3.2 EASO報告書は、一部の情報筋が次のように述べていると記述している。

「西洋から帰還したアフガニスタン人は、そのコミュニティや家族から尊敬され、肯定的に迎え入れられている。Neamat Nojumiによると、西洋での留学を終えて帰還すれば家族やコミュニティにとって大きな利益となるが、これとは対照的に、国外退去させられた場合は大きな失敗とみなされ、本人及びその家族に負の影響を及ぼすと見られている。Ali Latifiは、海外留学するために米国へ行き、その後帰還した際、家族から「アメリカ化」したとしてからかわれる例を挙げて、アフガニスタン人が国内をしばらく離れていた後で帰還した際、常にコメントやジョーク、疑いがつきまとうと説明した。アフガニスタン人が帰還した後にこのようなからかいや冗談の対象になるのは「普通」であるが、虐待や村八分を避けるためには、国内文化の慣習と実践に適合していく必要があると言葉を継いだ。」

14

5.4 差別及び烙印

5.4.1 難民支援ネットワーク（RSN：Refugee Support Network）は、2014年3月から2015年3月にかけてアフガニスタンに帰還した者25人（以前に欧州の国で時間を過ごした、同伴者のいない未成年者）をモニタリングした。その結果、RSNはアフガニスタンへ帰還した後の社会復帰に影響を及ぼす3つの重要な課題として、資金難、カブールから出て行かなければならない状況、及び家族と共に生活できない状況を挙げた¹⁵。

¹³ 欧州庇護支援事務所「EASO 出身国報告：アフガニスタン – 社会的及び法的規範の下で標的にされる個人」（96 頁）（2017 年 12 月）

https://coi.easo.europa.eu/administration/easo/PLib/Afghanistan_targeting_society.pdf.

[アクセス日：2017 年 12 月 20 日]

¹⁴ 欧州庇護支援事務所「EASO 出身国報告：アフガニスタン – 社会的及び法的規範の下で標的にされる個人」（102 頁）（2017 年 12 月）

https://coi.easo.europa.eu/administration/easo/PLib/Afghanistan_targeting_society.pdf.

[アクセス日：2017 年 12 月 20 日]

¹⁵ 難民支援ネットワーク「帰還後：アフガニスタンに強制送還された若者の経験の記録」（18 頁）（2016 年 4 月）

5.4.2 帰還者は、帰還者として認識されることで「差別と烙印」に晒されたとRSN報告書は頻繁に記述している。同報告書は「若者の中には、当初の移住に対する家族の期待に応えられずに英国から帰還した際、家族から歓迎されない者もいれば、本人を帰還させるために利用できる資源があまりに限られている家族を持つ若者もいた。」と記述している¹⁶。

5.4.3 庇護希望者の申請を支援する弁護士向けに出身国情報（COI）を無料で提供するボランティアのグローバル・ネットワークであるAsylosは2017年8月に報告書「アフガニスタン：カブールに帰還した『西洋化した』若いアフガニスタン人男性の状況」を公表した。この報告書は、一般に閲覧できるCOIとアフガニスタンに関して専門知識を有する学者及び/又は弁護士の書面又は口頭の情報を組み合わせて作成されている¹⁷。

5.4.4 Asylos報告書は、庇護申請の失敗を巡る烙印を調査した学者のLiza SchusterとNassim Majidiの2014年10月付記事を引用し、「汚染」が国外退去させられた人々に付いて回ると報告している。引用されている記事には、アフガニスタンへ強制送還されたが、たとえば、服装、行動、アクセントなど文化的な変容の兆候も見られる若者は、家族やコミュニティから「汚染された」と見られることがあると記述されている。汚染という烙印の押され方は、経済的又は社会的地位もなく帰還した人々の場合には増幅される一方、人が成功した移民として帰還し、従って、本人の家族に利益をもたらす者として見られる場合には緩和されると同記事は追記している¹⁸。

5.4.5 Schuster/Majidiの記事は、「... 欧州から国外退去させられた人々の場合、その失敗に対して烙印を押される可能性がより高くなるように窺える」と記述されており、さらに、「... したがって、帰還者は社会的に期待されているものと現実に起きているものの間に乖離があることを理由に烙印、差別及び恥辱を経験している。」と追記している¹⁹。

https://hubble-live-assets.s3.amazonaws.com/rsn/attachment/file/8/After_return_April_2016.pdf. [アクセス日：2017年11月22日]

¹⁶ 難民支援ネットワーク「帰還後：アフガニスタンに強制送還された若者の経験の記録」（22頁）（2016年4月）

https://hubble-live-assets.s3.amazonaws.com/rsn/attachment/file/8/After_return_April_2016.pdf. [アクセス日：2017年11月22日]

¹⁷ Asylos「アフガニスタン：カブールに帰還した『西洋化した』若いアフガニスタン人男性の状況」（2頁及び4頁）（2017年8月）

<https://asylos.eu/wp-content/uploads/2017/08/AFG2017-05-Afghanistan-Situation-of-young-male-Westernised-returnees-to-Kabul-1.pdf>. [アクセス日：2017年11月22日]

¹⁸ Asylos「アフガニスタン：カブールに帰還した『西洋化した』若いアフガニスタン人男性の状況」（32頁）（2017年8月）

<https://asylos.eu/wp-content/uploads/2017/08/AFG2017-05-Afghanistan-Situation-of-young-male-Westernised-returnees-to-Kabul-1.pdf>. [アクセス日：2017年11月22日]

¹⁹ Asylos「アフガニスタン：カブールに帰還した『西洋化した』若いアフガニスタン人男性の状況」（31頁）（2017年8月）

5.4.6 2015年7月付 PRIOポリシー・ブリーフによると、大半の帰還者は暴力を受けるのではない、又は職を見出すに当たって困難に直面するのではない、あるいは本人の移住のために貯金又は借金してくれた家族を失望させてしまったために恥辱を受けるのではないといった全般的な恐怖感をあらわにしていた²⁰。

5.4.7 PRIOポリシー・ブリーフによると、調査参加者の中にはごく少数であるが、帰還後に特定の脅威（通常は金銭の要求）に晒された調査参加者もいた。これは、この調査でインタビューを受けた一人によると欧州からの帰還者は裕福であると思込まれているからであった。帰還者が直面したと伝えられているもう一つの思い込みは、帰還者が欧州で「西洋化した」又は「反イスラム化した」というものであった。インタビューを受けた一人は、「西洋化していない」ことを証明するには反政府集団に金銭を与えなければならないと脅されたと主張した²¹。

5.4.8 カブールに所在するアフガニスタン移住者助言・支援機関（AMASO：Afghanistan Migrants Advice and Support Organisation）ディレクターのAbdul Ghafoor は2017年5月に、Asylosからインタビューを受けた際、国外退去は巨大な烙印を伴い、失敗したという感情も付きまとうことから、本国送還されたことを家族に伝えたくない帰還者もいたと語った²²。

5.4.9 英国に本拠を置き、アフガニスタンに関して広範な研究経験があるDr. Anicée Van Engelandは2017年6月に行ったAsylosとの通信の中で、アフガニスタンへの帰還者に関する彼女の見解を示し、若い男性帰還者の多くは家族と本人に恥辱をもたらしており、金融資産もなく帰還すれば、失敗したとみなされると語った²³。

<https://asylos.eu/wp-content/uploads/2017/08/AFG2017-05-Afghanistan-Situation-of-young-male-Westernised-returnees-to-Kabul-1.pdf>. [アクセス日：2017年11月22日]

²⁰ オスロ国際平和研究所「アフガニスタン人は欧州から援助による自主的帰還を果たした後、社会復帰できるのか」（2015年7月付）

http://file.prio.no/publication_files/PRIO/Oeppen%20-%20Can%20Afghans%20Reintegrate%20after%20Assisted%20Return%20from%20Europe,%20PRIO%20Policy%20Brief%207-2015.pdf. [アクセス日：2017年11月22日]

²¹ オスロ国際平和研究所「アフガニスタン人は欧州から援助による自主的帰還を果たした後、社会復帰できるのか」（2015年7月付）

http://file.prio.no/publication_files/PRIO/Oeppen%20-%20Can%20Afghans%20Reintegrate%20after%20Assisted%20Return%20from%20Europe,%20PRIO%20Policy%20Brief%207-2015.pdf. [アクセス日：2017年11月22日]

²² Asylos「アフガニスタン：カブールに帰還した『西洋化した』若いアフガニスタン人男性の状況」（付属書2、82～83頁）（2017年8月）

<https://asylos.eu/wp-content/uploads/2017/08/AFG2017-05-Afghanistan-Situation-of-young-male-Westernised-returnees-to-Kabul-1.pdf>. [アクセス日：2017年11月22日]

²³ Asylos「アフガニスタン：カブールに帰還した『西洋化した』若いアフガニスタン人男性の状況」（付属書3、89及び92頁）（2017年8月）

5.4.10 ドイツに本拠を置く人権・難民保護機関のPRO ASYLは、2016年8月に公表した報告書「アフガニスタン：難民にとって安全な国ではない」（2017年5月に英語に翻訳された）の中で、帰還者には失敗した又は無責任に行動したという烙印が押される可能性があるとして記述している²⁴。

5.5 帰還者を標的にした事件

5.5.1 難民支援ネットワーク（RSN）は、一部の個人が帰還者としての立場を理由に標的にされたとして、次のように報告している。

「若い帰還者7人は、他の若い人々が単に帰還者ということだけで標的にされた事件について報告した。また、他の帰還者2人は、帰還者という理由で襲撃を受けるという特定のリスクに晒されるという認識があることを明確に述べた。

「若い帰還者は、タリバンや国内居住者から、『欧州諸国に渡り、現在は帰還している者はそれらの国のためにスパイ活動をしている』と見られているために、このような状況になると考えている。」²⁵

5.5.2 RSNは、帰還者としての立場に起因して発生したと言われている事件の例を挙げた。同報告書は、詳細情報を提供せず次のように伝えている。

「帰還者としての立場に起因して発生した7件の事案を例に挙げる。1件目：ある若い帰還者が『お前が英国から帰還したことを知っている』と語った者に銃を突きつけられて強盗にあった（R06, ILD）。2件目：ある者は『英国から自主帰還し、我々の住む地域で誘拐された者』を知っていた（R13, IAR）。3件目：ある帰還者は、親戚から故郷に戻ってくると警告された。警告した理由は『私（帰還者）が英国に渡っていて、帰還したことを過激主義者が知れば私の命が危なくなる。彼らは国外退去が何を意味するのかわかっていない！彼らは私を異教徒及びスパイと呼び、その場で私を殺すだろう。』というものであった（R25,

<https://asylos.eu/wp-content/uploads/2017/08/AFG2017-05-Afghanistan-Situation-of-young-male-Westernised-returnees-to-Kabul-1.pdf>. [アクセス日：2017年11月22日]

²⁴ PRO ASYL「アフガニスタン：難民にとって安全な国ではない」（14頁）（2017年5月）（2016年8月にドイツ語で初めて公表された）

https://www.proasyl.de/wp-content/uploads/2017/05/PRO_ASYL_Afghanistan_Broschuere_englisch_web_Mai17.pdf. [アクセス日：2017年11月24日]

²⁵ 難民支援ネットワーク「帰還後：アフガニスタンに強制送還された若者の経験の記録」（28頁）（2016年4月）

https://hubble-live-assets.s3.amazonaws.com/rsn/attachment/file/8/After_return_April_2016.pdf. [アクセス日：2017年11月22日]

ILD)。4件目：ある若者は、ISAF [International Security Assistance Force：国際治安支援部隊]に通訳者として勤務していた年上の帰還者がタリバンに誘拐された事件について話した。5件目：ある者はANA [Afghan National Army：アフガニスタン国軍]と関係がある別の年上の帰還者が殺害された事件について話した。」²⁶

5.5.3 帰還者は、同伴者のいない未成年者が以前に欧州の国で時間を過ごしたと伝えられたことにより殺害された事例2件をRSNに説明した。一人の少年[年齢情報は提供されていない]は英国から最近帰還し、彼の故郷にあるモスクの外で標的にされたと伝えられている。もう一人はノルウェーからの帰還者で、タリバンが彼の国際書類と銀行カードを発見し、彼を殺害したと説明している²⁷。

5.5.4 アフガニスタンに焦点を合わせた独立した政治アナリストのTim Foxleyは2017年6月に行ったAsylosとの通信の中で、「...反政府集団に遭遇したことで、同集団から迫害を受けた数件の事例」があったと語った。しかしながら、その後Foxley氏は「西洋化した」とされるアフガニスタン人に対して暴力が加えられた具体的な事例を2件のみ挙げて、次のように語っている。

「2014年9月付報告書はアフガニスタンに帰還した1人のアフガニスタン人の運命に焦点を当てている。彼は何年も経ってから帰還し、『西洋人』と見られ、タリバンの検問所でバスから引きずり降ろされた。この事件が起きたとき、彼はバスの唯一の乗客であった。彼は殴打され、拷問を加えられ、処刑された。2014年10月、ハザラ民族集団のメンバーは、オーストラリアで庇護申請を行ってからアフガニスタンに帰還した後、タリバンに捕えられ、拷問を加えられた。」²⁸

5.5.5 複数のメディア筋がSayed Habib Musawiの殺害について報道した。アフガニスタンとオーストラリアの二重国籍者であり、オーストラリアのパスポートを所有していた彼は、2014年9月6日にバスでガズニー（Ghazni）州とカブール間を旅行中、タリバン戦闘員により捕えられた。その後、拷問の痕のあるMusawi氏の遺体がタリバンの支配地域内で発

²⁶ 難民支援ネットワーク「帰還後：アフガニスタンに強制送還された若者の経験の記録」（29頁）（2016年4月）

https://hubble-live-assets.s3.amazonaws.com/rsn/attachment/file/8/After_return_April_2016.pdf. [アクセス日：2017年11月22日]

²⁷ 難民支援ネットワーク「帰還後：アフガニスタンに強制送還された若者の経験の記録」（29～30頁）（2016年4月）

https://hubble-live-assets.s3.amazonaws.com/rsn/attachment/file/8/After_return_April_2016.pdf. [アクセス日：2017年11月22日]

²⁸ Asylos「アフガニスタン：カブールに帰還した『西洋化した』若いアフガニスタン人男性の状況」（33～34頁）（2017年8月）

<https://asylos.eu/wp-content/uploads/2017/08/AFG2017-05-Afghanistan-Situation-of-young-male-Westernised-returnees-to-Kabul-1.pdf>. [アクセス日：2017年11月22日]

見された。ガズニー州のMohammed Ali Ahmadi副知事は、Musawi氏が オーストラリア市民であったために殺害されたと語った^{29 30 31}。また、メディアは、Musawi氏がハザラ民族であったと報道している³²。Musawi氏が標的にされたのは、彼が西洋化していたからではないというのが消息筋の一致した見方であった。

5.5.6 2014年10月、ガーディアン紙（The Guardian）は、2014年8月にオーストラリアからアフガニスタンへ本国送還されたハザラ民族系アフガニスタン人Zainullah Naseriの誘拐と拷問について報じた。Naseri氏は、路上検問所でタリバンに誘拐され、逃亡するまでの2日間に亘って拷問を受けたと証言した。この誘拐事件は、Musawi氏が拉致される1週間前に、同じ幹線道路上で起きたと伝えられている³³。ABCニュースはフィルム映像と記録を提供した。この中にはタリバンから逃亡した後に駐在所で呼び止められたNaseri氏に対する尋問の様子が映されているとアフガニスタン警察は語っている。Naseri氏は警察に対し、タリバンが彼のオーストラリアの運転免許証を取り上げ、彼を殴打し、「この男はオーストラリア出身だ。あの国は異教徒で溢れている。」と語ったと証言した³⁴。

5.5.7 2015年、ガーディアン紙は、ハザラ民族の10代の兄弟2人がデンマークから本国送還された事件を報じた。2人はアフガニスタンに到着し、故郷であるヴァルダク（Wardak）州へ向かった直後、強盗に遭い、弟が行方不明となった。その後、弟は遺体となって発見された。兄自身の陳述書によると、タリバンはハザラ民族であることを理由に弟を殺害し

²⁹ ABC ニュース「娘の考えでは、アフガニスタンで拷問を受け、殺害された二重国籍者の父は身代金を支払えば釈放されるはずであった」（2014年9月29日）

<http://www.abc.net.au/news/2014-09-29/daughter-of-murdered-afghan-australian-held-hopes-of-ransom/5775004>. [アクセス日：2017年11月23日]

³⁰ オーストラリアン紙（The Australian）「オーストラリア人男性 Sayed Habib がタリバンに拷問され、殺害される」（2014年9月29日）

<http://www.theaustralian.com.au/news/nation/australian-man-sayed-habib-tortured-and-killed-by-taliban/news-story/be118fde9aba2ac55dafb79524c39d60>. [アクセス日：2017年11月23日]

³¹ ガーディアン紙「オーストラリア人男性がアフガニスタンでタリバンに拷問され殺害される、家族が語る」（2014年9月28日）

<https://www.theguardian.com/world/2014/sep/28/australian-man-tortured-and-killed-by-taliban-in-afghanistan-family-says>. [アクセス日：2017年11月23日]

³² シドニー・モーニング・ヘラルド紙（The Sydney Morning Herald）「タリバンに殺害されたアフガニスタン系オーストラリア人の息子が難民認定を拒否される」（2014年9月29日）

<http://www.smh.com.au/national/son-of-afghanaustralian-killed-by-taliban-denied-refugee-status-20140929-10nrtp.html>、ガーディアン紙「オーストラリア人男性がアフガニスタンでタリバンに拷問され殺害される、家族が語る」（2014年9月28日）

<https://www.theguardian.com/world/2014/sep/28/australian-man-tortured-and-killed-by-taliban-in-afghanistan-family-says>. [アクセス日：2017年11月23日]

³³ ガーディアン紙「本国送還されたハザラ民族系アフガニスタン **庇護希望者** に対する『拷問』事件を捜査予定」（2014年10月9日）

<https://www.theguardian.com/australia-news/2014/oct/09/torture-of-deported-afghan-hazara-asylum-seeker-to-be-investigated>. [アクセス日：2017年11月24日]

³⁴ ABC ニュース「帰還したハザラ **民族** がタリバンの人質になる」（2014年10月27日）

<http://www.abc.net.au/lateline/returned-hazara-held-hostage-by-taliban/5845892>. [アクセス日：2017年11月24日]

たと兄は主張している³⁵。

5.5.8 これとは対照的に、国際移住機関（IOM）アフガニスタンの帰還・社会復帰・再定住に関する国内プログラム・マネージャーであるMasood Ahmadi は、欧州庇護支援事務所（EASO）との電子メール通信の中で、「...アフガニスタンへの帰還者に関して彼が有している情報に基づけば、政府軍と反政府勢力の間の十字砲火に巻き込まれて犠牲になる場合を除き、西洋諸国から帰還した人々が民族性を理由に殺害された事案はない。」と説明した³⁶。

5.5.9 複数の情報筋の報告によると、その圧倒的多数がシーア派イスラム教徒であり、アフガニスタンにおけるシーア派イスラム教徒の過半数を構成するハザラ民族はアフガニスタン国内で過激主義者の標的になってきた^{37 38}。ガーディアン紙が報じている通り、「...ハザラ民族コミュニティ、[...]は日常的にタリバンの迫害を受けてきている。Habib [Musawi] が拉致された地域で近年、他の宗教的・民族的少数派のメンバーが殺害される事件が複数発生している」³⁹。また、ABCニュースは 2014年9月に起きたMusawi氏殺害事件について報道し、「先週、タリバン戦闘員がこの地域で100人以上を殺害した...」と伝えた⁴⁰。アフガニスタンでは、身代金目的の誘拐が普通に起きている^{41 42}。

³⁵ ガーディアン紙「デンマークから本国送還され、不確かな運命に翻弄されたアフガニスタン人兄弟の悲劇」（2015 年 10 月 6 日）

<https://www.theguardian.com/global-development/2015/oct/06/tragic-tale-afghan-brothers-sent-home-from-denmark-to-an-uncertain-fate>. [アクセス日：2017 年 12 月 20 日]

³⁶ 欧州庇護支援事務所「EASO 出身国報告：アフガニスタン – 社会的及び法的規範の下で標的にされる個人」（95 頁）（2017 年 12 月）

https://coi.easo.europa.eu/administration/easo/PLib/Afghanistan_targeting_society.pdf. [アクセス日：2017 年 12 月 20 日]

³⁷ UNAMA「武力紛争における市民の保護：礼拝所、宗教的指導者及び礼拝者に対する攻撃」（脚注 5、3 頁）（2017 年 11 月 7 日）

https://unama.unmissions.org/sites/default/files/unama_report_on_attacks_against_places_of_worship_7nov2017_0.pdf. [アクセス日：2017 年 11 月 24 日]

³⁸ ヒューマン・ライツ・ウォッチ（Human Rights Watch）「アフガニスタンのシーア派ハザラ民族が最近の残虐行為の被害者となっている」（2016 年 10 月 13 日）

<https://www.hrw.org/news/2016/10/13/afghanistans-shia-hazara-suffer-latest-atrocity>. [アクセス日：2017 年 11 月 24 日]

³⁹ ガーディアン紙「オーストラリア人男性がアフガニスタンでタリバンに拷問され殺害される、家族が語る」（2014 年 9 月 28 日）

<https://www.theguardian.com/world/2014/sep/28/australian-man-tortured-and-killed-by-taliban-in-afghanistan-family-says>. [アクセス日：2017 年 11 月 23 日]

⁴⁰ ABC ニュース「娘の考えでは、アフガニスタンで拷問を受け、殺害された二重国籍者の父は身代金を支払えば釈放されるはずであった」（2014 年 9 月 29 日）

<http://www.abc.net.au/news/2014-09-29/daughter-of-murdered-afghan-australian-held-hopes-of-ransom/5775004>. [アクセス日：2017 年 11 月 23 日]

⁴¹ UNAMA「武力紛争における市民の保護に関する 2016 年度アニュアルレポート：アフガニスタン」（2017 年 2 月）

https://unama.unmissions.org/sites/default/files/protection_of_civilians_in_armed_conflict_annual_report_2016_final280317.pdf. [アクセス日：2017 年 11 月 24 日]

⁴² 米国国務省「2016 年人権慣行に関する国別報告書」（2017 年 3 月 3 日）

5.5.10 カブールに拠点を置く市立大学の学者であるDr Liza Schusterは、申請を却下された庇護希望者約100人にインタビューを実施し、調査ジャーナリズム研究所（Bureau of Investigative Journalism：独立した非営利のメディア機関）の2015年報告書の中で、欧州からの帰還者は、「しばしば、疑いと金銭の源として見られる」と語っている。同報告書は、衣類の着用の仕方やうまくコミュニケーションできないことが原因となってよそ者のような気がする」と語った帰還者の事例を挙げている。この帰還者は、金銭を要求するギャングにより誘拐され、殴打されたと証言した。また、同報告書には、「... アフガニスタンに送還された人々にどのようなことが起きているかについてはほとんど知られていない。」と記述されている⁴³。EASOが引用した他の報告書が示唆するところによると、西洋から帰還する個人は裕福であると認識されることにより、標的になることを恐れており、また、実際に標的になったと伝えられている⁴⁴。

5.5.11 独立したドキュメンタリー映画製作者でジャーナリストのShoaib Sharifiは、2016年4月に Asylosからインタビューを受けた際、帰還者はその見解や服装が西洋的であると認識されれば、標的になる可能性があるという考えを示した。しかしながら、西洋の国から帰還した後で、又は西洋のライフスタイルを実践しているとみなされたために、殺害された又は標的になった者については何も知らないと言った⁴⁵。

5.5.12 Dr Anicée Van EngelandはAsylosに対し、帰還者は、特にその文化的若しくは伝統的価値観又は宗教的教義を変えた場合、社会から「明確な拒絶」を受けたと言った。Dr Van Engelandは 家族から排除される理由となる変容の例として、アクセント、話しかけられていないのに話すこと、服装、ジム通い、スカイプを使って海外の友人に連絡を取ることなどを挙げた⁴⁶。

<http://www.state.gov/j/drl/rls/hrrpt/humanrightsreport/index.htm?year=2016&dlid=265530>. [アクセス日：2017年11月24日]

⁴³ 調査ジャーナリズム研究所「ケントからカブールへ：以前に庇護を求めていた児童がアフガニスタンへ強制送還される」（2015年7月17日）<http://labs.thebureauinvestigates.com/from-kent-to-kabul/>. [アクセス日：2017年11月22日]

⁴⁴ 欧州庇護支援事務所「EASO 出身国報告：アフガニスタン – 社会的及び法的規範の下で標的にされる個人」（99頁）（2017年12月）

https://coi.easo.europa.eu/administration/easo/PLib/Afghanistan_targeting_society.pdf. [アクセス日：2017年12月20日]

⁴⁵ Asylos「アフガニスタン：カブールに帰還した『西洋化した』若いアフガニスタン人男性の状況」（付属書5、107頁）（2017年8月）

<https://asylos.eu/wp-content/uploads/2017/08/AFG2017-05-Afghanistan-Situation-of-young-male-Westernised-returnees-to-Kabul-1.pdf>. [アクセス日：2017年11月22日]

⁴⁶ Asylos「アフガニスタン：カブールに帰還した『西洋化した』若いアフガニスタン人男性の状況」（付属書3、91～92頁）（2017年8月）

<https://asylos.eu/wp-content/uploads/2017/08/AFG2017-05-Afghanistan-Situation-of-young-male-Westernised-returnees-to-Kabul-1.pdf>. [アクセス日：2017年11月22日]

5.5.13 Abdul Ghafoorは、欧州からの帰還者はどのように認識されているかとAsylosから尋ねられた際、社会が帰還者を受け入れるかどうかは、帰還者が住む社会にかかっていると語った。Ghafoor氏は、たとえばカブールの場合、社会はより容易に帰還者を受入れるだろうと語った。Ghafoor氏は、服装や髪型から欧州に在留していた人々を認識することは容易であると語り、「帰還者が社会から排除されるときはある。」と言葉を継いだ⁴⁷。

5.5.14 Abdul Ghafoorは、2017年1月か2月にドイツからアフガニスタンに強制送還された者が「2~3週間前に殺害された」と同氏が主張する事案に言及した。同氏は、この殺害に関する詳細な情報を提供しなかった⁴⁸。IOMは、EASOとの通信の中で、ドイツからの帰還者の殺害は、「信頼できる情報筋からの確認が取れていない」と語った⁴⁹。ドイツから強制送還されたアフガニスタン人の事案に関する裏付情報は、CPITが意見を求めた情報筋の間で確認することができなかった。

5.5.15 EASO報告書には、次のような記述がある。

「Abubakar Siddiqueは、帰還者が西洋から帰還したという理由のみで標的にされることはないという見解を表明した。同氏は、個々の紛争において相手に対し西洋からの帰還を非難の材料に用いることはあるかもしれないと語り、他の異なる理由で相手を標的にするために、相手の西洋における過去に対する非難を手段として用いることができると説明した。たとえば、隣人は帰還者が西洋の国に在留していた過去について知っており、帰還者について悪い噂を流すため、又は何かで帰還者を非難するために、後にこの事実を材料として用いることができる。また、Marieke van Houteは、コミュニティにおける不信感が、隣人は帰還者を不利な立場に追い込むために帰還者の移住履歴を利用するのではないか（たとえば、帰還者に対する嫉妬又は羨望を理由として、タリバンにその事実を伝えるのではないかなど）という恐れを帰還者に抱かせると語った。Masood Ahmadiは地元住民の間の噂も帰還者にとっては同様に問題になっていると語ったが、IOMは西洋から帰還したアフガニスタン人が『西洋化』を理由に標的にされたという具体的事例を全く文書化していない。」

⁴⁷ Asylos「アフガニスタン：カブールに帰還した『西洋化した』若いアフガニスタン人男性の状況」（付属書2、83頁）（2017年8月）

<https://asylos.eu/wp-content/uploads/2017/08/AFG2017-05-Afghanistan-Situation-of-young-male-Westernised-returnees-to-Kabul-1.pdf>. [アクセス日：2017年11月22日]

⁴⁸ Asylos「アフガニスタン：カブールに帰還した『西洋化した』若いアフガニスタン人男性の状況」（付属書2、83頁）（2017年8月）

<https://asylos.eu/wp-content/uploads/2017/08/AFG2017-05-Afghanistan-Situation-of-young-male-Westernised-returnees-to-Kabul-1.pdf>. [アクセス日：2017年11月22日]

⁴⁹ 欧州庇護支援事務所「EASO 出身国報告：アフガニスタン – 社会的及び法的規範の下で標的にされる個人」（96頁）（2017年12月）

https://coi.easo.europa.eu/administration/easo/PLib/Afghanistan_targeting_society.pdf. [アクセス日：2017年12月20日]

付属書 A

参照した追加の情報源

Afghanistan Analysts Network (アフガニスタン・アナリスト・ネットワーク)

「2016/17年におけるアフガニスタンへの自主的及び強制的帰還：傾向、統計及び経験」
(2017年5月19日)

<https://www.afghanistan-analysts.org/voluntary-and-forced-returns-to-afghanistan-in-201617-trends-statistics-and-experiences/>

Amnesty International (アムネスティ・インターナショナル)

「危険への強制送還：庇護希望者が欧州からアフガニスタンへ帰還」 (2017年10月)

<https://www.amnesty.nl/content/uploads/2017/10/Afghanistan-Report-EMBARGOED.pdf?x44743>.

European Council on Refugees and Exiles (欧州難民協議会)

「アフガニスタン移住者助言・支援機関のAbdul Ghafoorとのインタビュー：EUとアフガニスタンの1年間の共同取組み」

<https://www.ecre.org/interview-with-abdul-ghafoor-afghanistan-migrants-advice-support-organisation-on-one-year-joint-way-forward-between-eu-afghanistan/>.

Forced Migration Review (強制移住のレビュー)

「強制送還後に直面するリスク：アフガニスタン人の若者が経験する帰還」 (2017年2月)

<http://www.fmreview.org/sites/fmr/files/FMRdownloads/en/resettlement/bowerman.pdf>,

「アフガニスタン人帰還者は変革をもたらす役者？」 (2014年5月)

<http://www.fmreview.org/sites/fmr/files/FMRdownloads/en/afghanistan/vanhoute.pdf>

International Organization for Migration (国際移住機関)

「2016年自主的帰還の概観」 (日付なし)

<https://www.iom.int/sites/default/files/country/docs/afghanistan/IOM-Afghanistan-Overview-of-Voluntary>Returns-in-2016.pdf>

⁵⁰ 欧州庇護支援事務所「EASO 出身国報告：アフガニスタン – 社会的及び法的規範の下で標的にされる個人」(102 頁) (2017 年 12 月)

https://coi.easo.europa.eu/administration/easo/PLib/Afghanistan_targeting_society.pdf.

[アクセス日：2017 年 12 月 20 日]

Majidi, N. 及びHart, L.

「アフガニスタンへの帰還及び社会復帰：政策に対する影響」（38~41頁）、移住政策の実践、2016年6~9月

http://publications.iom.int/system/files/pdf/migration_policy_practice_journal_27.pdf

バージョン管理及び連絡先情報

連絡先

本情報ノートについて質問があり、貴職のラインマネージャー、上級ケースワーカー又は技術スペシャリストが貴職の力になることができない場合、あるいは本情報ノートに事実誤認があると貴職が考えるとき、[国別政策・情報チームまで電子メールを送信していただきたい](#)。

本情報ノートにフォーマットエラー（リンク切れ、スペルミス等）があることに気付いた場合、又はレイアウトやナビゲーションについてコメントがあれば、[指針・規則・様式チーム（Guidance, Rules and Forms Team）まで電子メールを送信する](#)ことができる。

承認

本情報ノートの承認に関する情報は下記の通り。

- 第 1.0 版
- 2018 年 1 月 16 日から発効

本書の直近版からの変更点

初版